

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

アユ

Plecoglossus altivelis

「川魚の女王」と呼ばれるアユは、見てよし、釣ってもよし、香りもよし、さらに食べてよしの魚です。川魚の中でも、別格といえるほどの気品と美しさを持ち、古くから親しまれています。漢字でも、鱗が小さいことから「細鱗魚」や、一年でその一生を終えてしまうものが多いことから「年魚」、スイカやキュウリのような独特の香りがすることから「香魚」と呼ばれたり、様々な表記がみられます。成魚の全長は大きいもので



天然のアユは細身であるがさわやかな香りがする

30cmになりますが、地域や個体によって異なり、10cmほどで成熟するものもみられます。体の特徴としては、口にある歯が丸く、櫛状にならんでいることから櫛状歯と呼ばれています。川で見かけるアユは、石などに付着したケイ藻類をこの歯でそ



ぎ取るようにして食べています。

アユは、海と川を往き来する両側回遊魚としても有名ですが、琵琶湖産のアユは、海に下る代わりに、琵琶湖を利用しています。琵琶湖のアユには、他の地域のアユと同様に大きく成長するもの（オオアユ）と、湖内にとどまって、大きく成長しないもの（コアユ）がみられます。琵琶湖のアユは、他の地域のアユと比べて、特になわばり意識が強いとされているため、友釣りに利用されています。このため、琵琶湖のアユが友釣り用に各地で利用されてきた結果、各地域の海産由来のアユと交配し、その稚魚は、海に下っても翌年遡上しないため、もともとの地域にすんでいたアユの減少が心配されています。

under the water

the waterside

the sky & land

水辺の

虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省 環境カウンセラー 川島 大助

ナカセコカワニナ

琵琶湖・淀川水系には18種類のカワニナ類が生息し、その多くは琵琶湖固有種です。ナカセコカワニナ（殻高20mm）も琵琶湖固有種のカワニナ類で、カワニナというよりはタニシのようなずんぐりとした体型をしています。流れの速い礫に流されないように付着するために、体層（殻口から一回りした巻き）が発達し、このようなタニシのような体型になったと考えられています。かつては、琵琶湖や淀川にも生息していたようですが、現在では姿を消し、宇治川や瀬田川の限られた水域にのみ生息しています。本種は貴重種で、環境省：絶滅危惧Ⅰ類、水産庁：危急種、滋賀県：絶滅危機増大種、京都府：絶滅危惧種、大阪府：絶滅種に指定されています。宇治川では、河川工事が行われる際には本種の保全措置がとられ、事前に工事箇所及び影響箇所からの本種の移植（安全な場所へ救出）も行われています。これらの効果もあり、宇治川では現在でもたくさんのナカセコカワニナをみることができます。これほど多くのナカセコカワニナを見ることができる河川は、世界中で宇治川だけです。



カワニナであるがタニシのような姿をしている

水深の浅い水際でも簡単に見ることができますので、宇治川に行ったらはこのずんぐり体型のナカセコカワニナを観察してみてください！



the worst 100

侵略的外来生物 淀川ワースト100



キク科 **オオキンケイギク**
Coreopsis lanceolata

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



5月頃から、法面に黄色い花を咲かせているのを見たことがないでしょうか。花はコスモスに似た形状。成長が早いので、競合がおらずにあっという間に一面を覆い尽くしていきます。とても強靱で、かつては道路の法面緑化に使用されたり、園芸植物として流通していました。現在は特定外来生物に指定されているため、駆除する必要があります。しかし、多年草であり、種子が地中に残っていると翌年にも咲く可能性が高いため、なかなか抑圧できません。刈り取ることは法に触れるので、ごみ袋の中で枯らす必要があります。駆除をする際には自治体に相談の上、処理の方法を聞いてから実施するのが望ましいでしょう。



特定外来生物と知らない人がお地藏さまにお供え...



きれいな花ではあるが繁殖力が異常に強いので注意

花想鳥感

四季折々、
水辺の生物多様性

芥川緑地資料館 主任学芸員
高田 みちよ

湿地のタコノアシ

タコノアシと聞いて何を思い浮かべますか？ 刺身や寿司なんかで美味しい8本足のタコの足？ タコのイラストや茹蛸（ゆでだこ）の足は、赤っぽくクルッと丸まっていますよね。タコがさかさまになって棒に刺さったような奇妙な植物、その名も「タコノアシ」。湿地に生える高さ80cmぐらの植物で、夏になると数本の枝に小さな花が多数つきます。秋に果実が赤っぽく熟してきた姿は茹蛸そっくり。河川下流域・河口域の湿地、水田周辺などに生育し、以前は珍しい植物ではありませんでしたが、最近ではめったに見られなくなりました。淀川では、鶴殿や芥川の合流部に整備された切り下げ地などに生育しています。淀川はダムと堰による水位調整により、大雨が降っても川原に水が流れません。そのため、ごろ石の川原や湿地が維持されなくなり、土がたまり、大きな木や背の高い草が生えるようになりました。こうなってしまうと湿地の背の低い植物は競争に負けてしまいます。幸い、タコノアシは埋土種子といって何年も地中でチャンスを待てる種子を作るので、人工的につくった湿地でも、突然生えてくることがあります。湿地の植物にとって、時々地面がぐちゃぐちゃにかき回される「攪乱」はとても大切なことなのです。

赤い果序が
たこの足のように見える

